

2003年12月23日

人間科学研究科委員長殿

## 小林孝広氏 博士学位申請論文審査報告書

小林孝広氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2003年12月18日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告いたします。

### 記

1. 申請者氏名 小林孝広

2. 論文題目 リスクと生活保全の人類学的研究  
副題 フィリピン・パナイ島汽水域住民の事例

3. 本文

目的：本論文の目的は、申請者が過去数年にわたって現地調査を行ってきた、フィリピン中部パナイ島のイビサン町（人口2万3000、世帯数4400）の住民たちが、汽水域における漁業とそれに密接に関わる日々の暮らしの中で遭遇するさまざまなリスク（現地語で「デリカード」）をどのように認識し、それにいかなる対処法（「ディスクアルテ」）を用いているかを、彼らの生活保全メカニズムという点から論じるところにある。たしかにフィリピン社会の研究は、これまでわが国はもとより欧米の人類学者によって少なからず展開されてきた。むろん漁業を取り上げた研究もある。しかし、本論文のように、リスクを全面に押し立て、その対処法と生活保全に、つまり人々が「生きている」まぎれもない日常世界に目を向け、そこから当該社会の物質的かつ精神的メカニズムを解明しようとした研究は皆無に近い。本論文の独創性はまさにここにこそある。

構成：本論文は「序論」、第1章「日常的リスク delikado と diskarte」、第2章「貧しい季節を生きのびる」、第3章「販台上のディスクアルテ」、第4章「汽水漁場の利用のディスクアルテ タバ漁師を中心にして」、第5章「サデ網：暮らしの最終兵器 養魚池の展開とサデ網漁師」、第6章「居住地を守る - 小さな人々の土地をめぐるディスクアルテ」、「結論」から構成されている。まず、序論において取り上げられているのは、リスクに関する先行研究である。

周知のように、リスク研究は、ひとり文化人類学のみならず、社会学や歴史学などで近

年とみに話題となっている主題だが、本論文はこれら先行研究を概観したのち、とくに象徴主義的人類学者のメアリー・ダグラスや経済生態学者のエリザベス・カッシングらのリスク理論に目を向け、たとえば前者がリスクを隠喩のレベルに還元しすぎるあまり、個々のエージェントの介在を看過しすぎていると批判し、後者についてはそれを実体的にとらえていると評価する。そして、こうした一連の先行研究の検討を経てから、申請者はピエール・ブルデュエのいう「シャン(場)」の概念に着目する。この社会的諸力のポジションを巡る実践的な闘争の場としての「シャン」とはまた、人々の生活意識と生活そのものが営まれる場であり、本論文に登場する市場商人や漁師たちの「生きんがための戦略」であるディスカルテが、さまざまな形をとって発揮される場にほかならない。申請者の論述は、そこから第1章へと向かう。

第1章では、当該社会の多様な生業やさまざまな生活の場におけるリスク・イメージを析出し、住民たちがそれをいかに認識しているか、そしてそれにいかなるディスカルテを用いているかが、包括的に語られている。ここではこれらの3通りの位相が、けっして1対1対応的ないし記号的な関係にあるのではなく、時にはディスカルテがリスク認識を生起させる要因にもなっているという。つまり、しかじかの状況がデリカードになるかどうかは、本人のディスカルテ次第であり、ディスカルテのないことが、何にもましてデリカード状態をもたらすというのだ。住民たちの日常的な言語表現に、ディスカルテという語が好んで登場しているが、この対処法を十全に使えない者が「一人前」として扱われないという認識は、じつにここに起因するともいう。

イビサン公設市場における商人たちのディスカルテを扱った第2章では、市場のレイアウトから鮮魚商人の販売戦略までが、インテンシヴな現地調査から再構築されている。ここでは数人の商人による鮮魚販売の実態が、扱う魚種や呼称、価格などが克明に記述されている。さらに、不安定な漁獲量や資金不足、商人同士の競合に対処ないし回避するためのディスカルテ、すなわち利益折半の共同出資システムである「カソシオ」や、「早い者勝ち」を意味する「パウナウナ」が具体的に論じられている。

第3章もまた、前記公設市場の情景に関わるが、ここでは商人と客との間の、互いにディスカルテを駆使してのやり取りが、実際に観察された言説を通して生き生きと再現されている。また、時には腐った魚すらも鮮魚のように見せて売りつける、魚商人たちによる販台上での魚の飾り付けにも着目し、「最小限の努力で最大限の利益を引き出す」ディスカルテのあり方を、レヴィ＝ストロースのいう「プリコラージュ」に見立ててもいる。

汽水域漁場の利用システムと、そこで行われている漁法を丹念に調べ上げた第4章と第5章は、いわば本論文の真骨頂ともいえるべきものであり、この領域における申請者の卓抜した力量が十分にみとれる。

まず第4章では、河口(タラバハン)漁業における操業人数、船の有無、干潮・潮流、操業時間帯、漁獲物、流通、資本、税などを、漁具漁法ごとに分類整理し、さらに同漁場利用の歴史的変遷や漁法間の競合関係の実態をもきわめて精緻に追究している。そして、

タバ漁を営む漁師たちのテリトリーを河口の見取り図の中に明示して、そのディスカルテの特徴を指摘しつつ、漁だけでは暮らしていけない彼らの複合的な生業形態をも考察する。彼らはまた、漁具を新調するに際して、資金不足を資金力のある知人とクンバレ（擬制的兄弟関係）を結ぶというディスカルテも多用するという。

続く第5章は、1980年代におけるマングローブ沼地の開拓による養魚池の半減と、それに伴うイビサン湾汽水域での養魚池の倍増によって、伝統的なミルクフィッシュ養殖から主に日本を輸出先とするエビ養殖への転換が生じたことに目を向け、後者を漁獲対象とするサデ網漁法を論じたものである。申請者はまずエビの分類とその流通経路を明示し、それぞれのエビに対応するサデ網漁具の構造、漁業の実態、市場・販路について、詳細な検討を行っている。さらに、1970年代、80年代、90年代に実際にこのサデ網漁業に携わっていた（いる）漁師、すなわち複合生業型、専業型、家計補助型の漁師の実情を、統計資料やインタビューによって再現している。こうして引き出されたのが、次のような本章の結論である。すなわち、若年世代に限定された就業から、70年代の多就労形態の一環としての複合生業システムへ、そして80年代のとくに養魚池との共生関係を重視する専業化を経て、90年代の稚エビの漁獲量の減少化現象にともなうミルクフィッシュ漁への回帰という就労形態の変化がみられ、こうした変化にこそ、当該漁民たちの生業に関わる本源的なディスカルテがみてとれる、というのだ。

第6章は、漁業の現場から離れ、地権者（「大きな人々」*dako nga tawo*）から立ち退きを迫られた借地人（「小さな人々」*gagmay nga tawo*）のディスカルテを論じたものである。医者や弁護士、養魚池所有者、海外出稼ぎ者などからなる前者は、地域（再）開発に伴う地価の上昇によって、多くが彼らと借地契約を交わしていない、いわば「細民」ともよぶべき人々に、その土地からの退去を求めようになっている。とりわけそれは、地権者の代替わりによる場合が多いが、申請者は彼らの生活を決定的に脅かすこうしたリスクに対して、いかなるディスカルテが用いられているかを、数件の事例から具体的に解き明かす。たとえば、鮮魚市場の客に対するのと同様に、地主のカロオイ（慈悲）を乞うたり、小作人の場合は、聖週間の準備に参加して地主に敬意を捧げ、あるいは小作権を主張したり、さらに宅地に有用樹木を植えて、立ち退きを迫られた際に地主にその樹木を購入してもらったり、といったディスカルテである。もとよりこうしたディスカルテがどこまで功を奏するかは、事例によって異なるが、立ち退きというデリカードは、彼ら貧しい人々が当該地で築き上げた生活自体や社会的・人間的関係を奪うだけでなく、ディスカルテハン（*diskartehan*）、すなわちディスカルテを発揮する場そのものをも奪うのだという。

本論文の結論部は、以上の考察をまとめるだけでなく、さらにそれを展開する内容となっている。すなわち、そこではディスカルテが発揮される場を「資源」と見立て、それをモノ、コト、ツナガリに分類する。そして、こうして「資源化」される資源をそれぞれモノ、状況・制度、個人的関係とし、各々の運用の特徴を、組み合わせ、読み替え、協力要請にあるとする。申請者は指摘している。《ディスカルテがリスク・イメージとリスク認

識を媒介し、リスク認識が特定のディスカルテを要求するという意味で、リスクと実践は相互規定の関係にある。ディスカルテという実践は、生活上の必要性や目的に即して、社会的な構造により意味づけられる「資源」を資源化し、それを運用することであり、そのかぎりにおいて、この実践行為は構造に一方的に規定される規範的行為ではなく、また全能なる能動性を備えた主体的行為でもない。それはいわば「生活術」といった次元にある。つまり、少なくとも調査地においては、法的・慣習的制度が直接的に人々の生存を保障するのではなく、生活保全という次元では、まさにディスカルテがそれを互酬的かつ汎用的に保障する装置となっているというのだ。

以上の考察は、論述に多少の乱れがあるとはいえ、具体的な事例に基づく新たなリスク研究を志向して斯界に大いに寄与すると思われるものであり、本論中の随所に盛り込まれた精緻なモノグラフィもきわめて高い資料性を帯びている。このことから、当審査委員会は小林孝広氏の博士学位申請論文『リスクと生活保全の人類学的研究』が博士（人間科学）に値すると判断するものである。

#### 小林孝広氏博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授・博士（人間科学）早稲田大学	蔵持不三也
審査員	早稲田大学教授・理学博士（東京都立大学）	沖野外輝夫
審査員	早稲田大学教授・博士（人間科学）早稲田大学	店田 廣文
審査員	早稲田大学教授	矢野 敬生